

はじめに 内裏の東・北・西辺には築地で区画した官衙（内裏外郭官衙）を整然と配し、その東と西には幹線排水路を設けていたことが過去の調査によって明らかになっている。今回の調査区は、内裏東外郭官衙及び東の幹線排水路（東大溝）の北方にあたり、平城宮の北限である北面大垣近くに位置する。調査面積は約3000㎡である。

遺構の概要 今回検出した主な遺構は、掘立柱建物10棟、塀2条、井戸1基、溝17条、土塚6基、焼土ピット5基である。これらの遺構は大きく4期（A～D）に区分することができる。

A期（SD 01・03・14～16・21・22, SK 04・05・17～19・31～35）

この時期には建物がない。東大溝SD 2700の北延長線位置に南北溝SD 01（幅約1.8m、深さ約0.5m）を設けるが比較的早く埋め戻す。SD 21は幅11m以上、SD 22は幅約1mでともに東流する。SK 31～35は0.8×0.4m前後の隅丸長方形の焼土ピット。底に炭が厚く残る。SK 17～19は焼土・炭を含む土塚。土塚SK 04・05・18及び溝SD 14～16は古墳時代の可能性がある。

B期（SB 06・12・29, SD 02・11・39・40）

SD 01にかえてSD 02を設け、その西に9尺方眼で整然と割り付けた建物群を配す。

SB 06は桁行5間（9尺等間）、梁行4間（身舎9尺等間、庇12尺等間）の床張りの東西棟。SD 12は桁行9間（9尺等間）、梁行4間（身舎・庇とも9尺等間）の東西棟。SD 11はSB 12の南雨落溝。SB 29は桁行10間、梁行2間（ともに9尺等間）の床張りの南北棟で、南2間分を仕切る。

SD 02は幅3m以上、深さ1.5m以上のやや斜行する溝で、南端ではA期のSD 01位置で南流する。東大溝SD 2700になるものであろう。SD 39・40は残りが良くないが、この建物群の北・西辺を画す溝と考えられる。

C期（SB 07・09・13・20・24・30, SE 08, SD 10・27, SK 36）

B期の配置をほぼ踏襲して建物を建て替えた時期である。

SB 07は桁行5間（10尺等間）、梁行4間（身舎10尺等間、庇13尺等間）の東西棟。SB 09は桁行3間（10・7・7尺）、梁行3間（6尺等間）の東西棟で、西1間分を仕切る。SB 13は桁行5間（10尺等間）、梁行3間（身舎10尺等間、庇12尺）の南庇付東西棟。SD 10はその南雨落溝。SB 30はSB 29を踏襲するが、西に庇（10尺）を設け、南2間分を仕切って床張りとする。SB 24は桁行5間（10尺等間）、梁行2間（9尺等間）の東西棟で、北の一部に庇（9尺）を付ける。SD 27はその西雨落溝。SB 20は北西隅を検出したにとどまる（柱間10尺）。

SE 08は一辺約1.3mの井籠組の井戸で、井戸屋形（柱間10尺）を伴う。SK 36は一辺約5m、深さ約0.6mの方形土塚であるが、掘さく後それほど時期を経ずに埋め戻している。SD 02・39・40はこの時期にも存続する。

D期（SB 26, SA 23・25, SD 37）

主要な建物を廃絶し、調査区の南辺に建物・塀が疎らに建つ時期である。

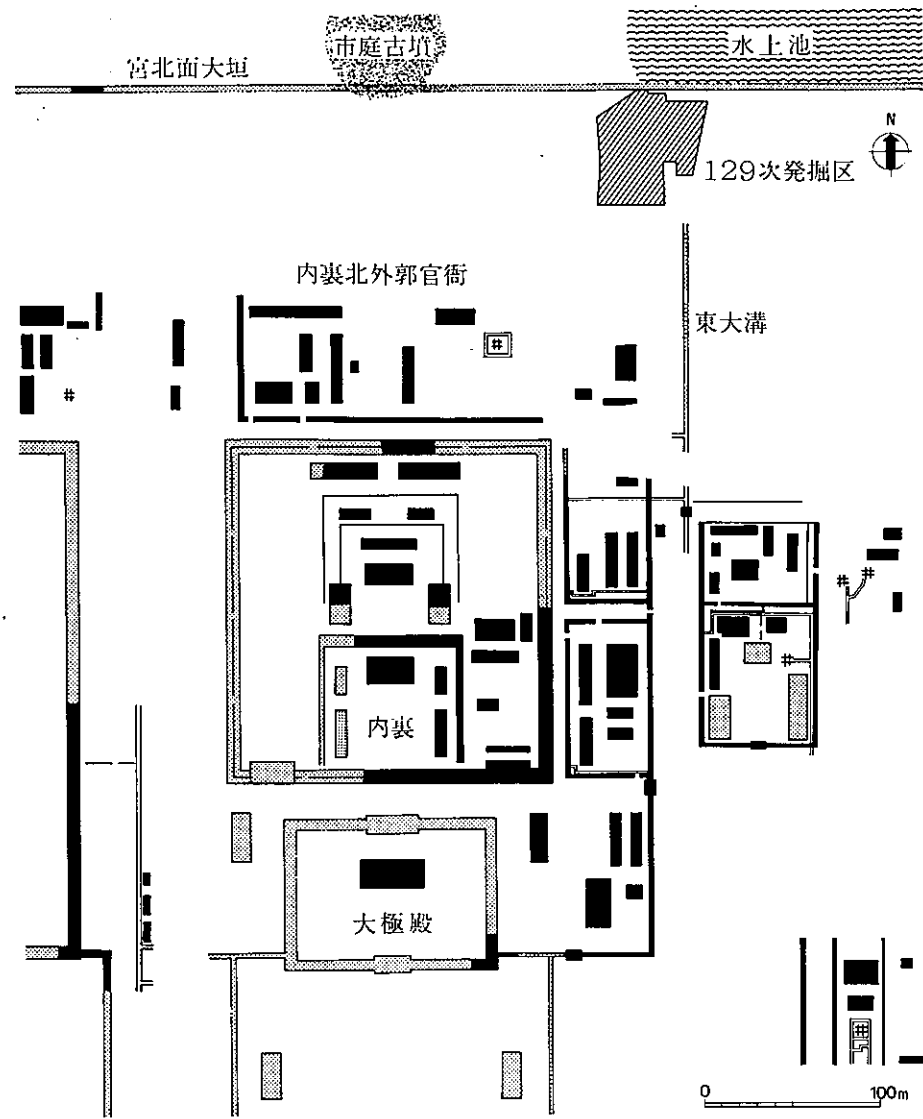
SB 26は桁行4間（9尺等間）、梁行3間（身舎9尺等間、庇10尺）の西庇付南北棟建物。SA 23・25はともに2間分検出（それぞれ7尺、5尺等間）。SD 37は幅0.5～1.2m、深さ0.2～0.8mの斜行溝である。

遺物 SD 02を中心に木製品・土器・瓦など多くの遺物が出土している。木簡は約30点、墨書土器は約10点で、このうちには天平12～18年の紀年をもつものが5点ある。軒瓦は約80点で、平城宮出土軒瓦編年第Ⅱ・Ⅲ期のものが多い。

まとめ A期のSD 01及びSK 19からは奈良時代前半頃の土器及び第Ⅱ期の軒平瓦6663型式が出土し、C期のSB 07の柱掘形から天平末年頃の土器、SB 13の柱掘形から第Ⅲ期の軒平瓦6721型式が出土している。さらに、C期のSB 13・20・30の柱痕跡及び柱抜取穴から奈良時代末頃の土器が出土している。

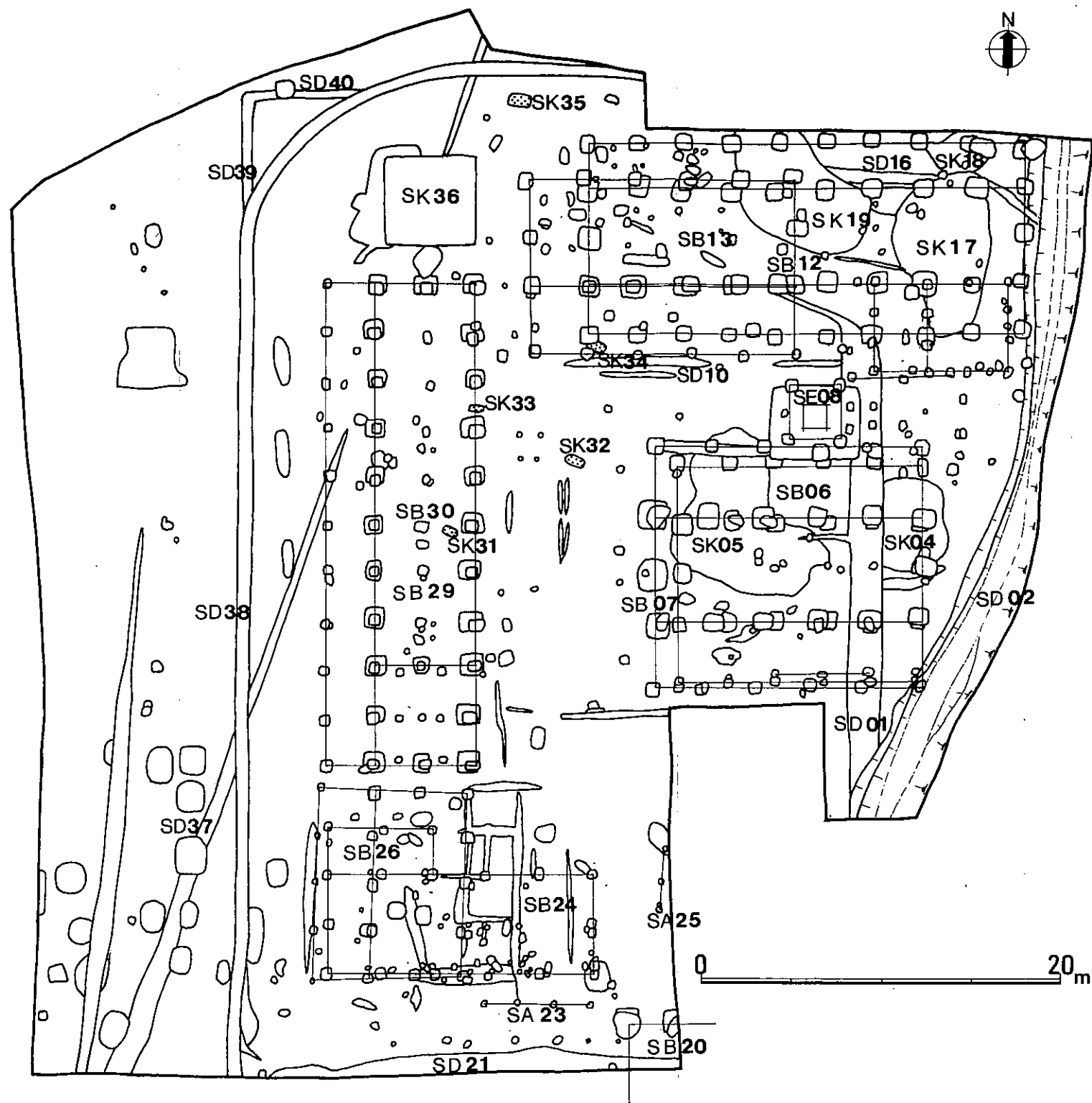
したがって、C期は天平17年の平城遷都後～奈良時代末、D期は平安時代初め、B期は天平年間、A期は平城宮造営開始～天平初年頃に比定できる。

今回調査した地域は、空間地に近い状況に置かれていたA期を経て、B・C期に建物を整然と配置するに至っている。これらの建物群の性格決定はこれからの課題であるが、SD 02から出土した天平18年の紀年がある墨書土器に皇后宮職少属の「川原蔵人凡」の名がみえることなどから皇后宮職に密接なつながりをもった官衙と考えることもできよう。



平城宮推定第2次内裏周辺遺構配置図

■ 発掘した遺構



129次検出遺構図

第 129 次 SD 02 出土木簡

- 1 車持宅良
女孺 倭畫師大虫 天平十八年潤九月廿四日
- 2 次長 高市息繼 中臣
紀三黒 安曇廣刀自 □
- 3 (表) □
(裏) □平十二年□月 五日案□三嶋□□
[天] 守□□民 [鷹養カ]
- 4 (表) □□□古女 凡小女笏王
[阿] □□□□ □□□□
(裏) 天平十八年十一月十三日
- 5 申陪從
- 6 南無龍自在王佛
- 7 昨夜□□急今□□ 飛故京千万里誰為送□□ [寒カ]
- 8 參河國播豆郡折嶋海部供奉二月祈御贄佐米楚割六斤
- 9 苦田郡林田郷替大豆五斗進上
- 10 備前國邑久郡旧井郷奈勝小國白米五斗

第 129 次 SD 02 出土墨書土器

天平十八年十一月廿日凡 美濃國安八郡 凡
 舍人安曇万呂 蔵人凡 月廿日少属川原蔵□ [人]

□□道來道口田木郡 [遅カ]
 十一月□属川蔵 [少] 原

美濃國安八郡壬生郷 日二升四合
 美濃國安八郡 飯四斗米 三斗